

夏の終わりのこと、T氏は定期健診で胃に影が見つかりました。夫人と二人で精密検査の結果を聞くと、「末期の胃癌により、余命四ヶ月」と宣告されました。氏は仕事を整理して、闘病に専念することにしました。それからT氏が亡くなるまでの歳月は、夫婦二人が歩んだ道を振り返る日々となったのです。

T氏は戦災孤児で、親の名も知らずに育ちました。氏が結婚を意識する年齢となり、何回かのお見合いの後、最後に言われたのが「この馬の骨ともわからぬ奴に、娘はやれない」との言葉でした。お見合いの失敗を七回繰り返した後に、氏は親友の熱心な紹介によって夫人との縁を得ました。

後年の体験報告の中で、「嫁にもらってやった」という言葉がありますが、私のもとには誰もお嫁に来てくれませんでした。ですから、私は妻を「お嫁にきていただいた」という気持ちで迎えました」と氏は語っています。守るべき家族を得たことを機に、T氏は以前にも増して懸命に働き、同時に家事にも積極的に取り組みました。妻の負担を少しでも軽くしたいと願ったからです。

結婚して一年後には子宝に恵まれ、小学生になると子供たちに家事の手伝いをさせました。月末になると毎月のように「お母さんをいつも助けてくれてありがとう」と子供たち丁寧に御礼を述べてから、お小遣いをわたしたと言います。

氏は目覚めるとまず、隣に妻がいることを確認します。「よかった。今日も自分のものごとにくれた」と感謝して一日が始まります。仕事を終えてからの帰路、家の灯りが見える

## 謙虚な心で夫婦道を歩もう、実践しよう



え・牧えみこ

と、「自分には家族がいるのだ」とたまたまなく嬉しくなり、足取りが軽くなります。夕飯は努めて家族と共にして、団欒を楽しみました。病気の時以外は夫婦で一組の布団で休み眠りにつくまで語り合いました。

やがて子供たちは成人式を迎え、そして結婚。孫も授かり、その伴侶と合わせて家族が再び増え始めました。そしてガンの宣告……。

それからの日々は、仕事に子育てにと毎日が忙しかった夫婦にとって、最も穏やかな日々となったのです。親友や恩人のもとへ挨拶に赴き、二人の思い出の地を巡りました。

そして迎えた最期の朝、氏は力を振り絞り、「貴女と結婚できてから、僕の人生は毎日が最高だった。僕のもとにお嫁にきてくれて、本当にありがとう」と最愛の妻に感謝の言葉を伝えて旅立っていきました。

数日後、夫人は告別式の出棺の折、次のように述べました。

「六十一年の人生、お疲れ様でした。子供たちも立派に成長しました。安心して、ゆっくり休んでください。貴方にお嫁にもらっていただいたことからの三十五年間、私は幸せでした。ありがとうございました」

縁あって出会い、永遠の愛を誓って始まったのが夫婦生活です。たった一人の妻を、夫を愛し続ける。これに勝る夫婦愛和の実践はありません。「恵まれたから感謝する」のではなく、「感謝するから恵まれる」のです。

世界中でただ一人選んでいただいた、結婚していただいた という謙虚な気持ちを生涯見失うことなく、夫婦道(どう)を一步一步踏みしめていく人生を送りたいものです。